写真展

想い出の水郷

－今から30数年前の霞ヶ浦・利根川周辺の暮らし－

ごあいさつ

「思い出の水郷」は、およそ30年前、稲敷市から潮来、佐原（香取市）に広がる霞ヶ浦、利根川流域、水郷地帯の稲作を中心とした風景と生活のひとこまです。効率と生産性重視の現代からは掛け離れた、のどかな情景が展開されていました。

また、古来の農業から機械化農業への転換の時期でもあり、機械化の進む傍らで、水路と舟と人々にはゆったりとした時間が流れていました。

水の音、舟の音、子供たちの声、早乙女たちの笑い声「和みと癒し」を感じとっていただければこの上ない喜びです。

平成18年11月

鴻野　伸夫

茨城県霞ケ浦環境科学センター
Ibaraki Kasumigaura Environmental Science Center

No.1　家路１

昭和43年　佐原市大倉新田
（現香取市）

稲刈鎌二本と弁当箱を持って裸足で帰る。
右側の家の人と挨拶でもしているところか。

No.2　家路２

昭和42年　佐原市篠原新田
（現香取市）

汚れた田モンピキを脱いで襦袢（じゅばん）
と腰巻き姿。田植えの時期であろう。

No.3　移動販売車１

昭和43年　佐原市中洲付近
（現香取市）

佐原から野菜類を売りに来る。週に2回くら
い廻ってきた。畑の少ない島の暮らしには重
宝な車だった。

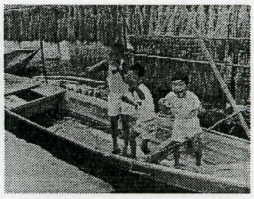
No.4　移動販売車２

昭和43年　佐原市中洲付近
（現香取市）

No.5　笑顔を乗せて

昭和42年　佐原市中洲
（現香取市）

苗取りの帰りだろうか。右端の女性の腰には
苗を束ねる藁が付いている。



No.6　水郷の子ら

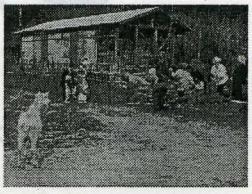
昭和43年　佐原市附洲
（現香取市）

子供達が乗る舟は生簀を備えた漁に使う
さっぱ舟で、後ろにはコイウケや竹で組んだ
生簀が見える。その上においてある柄のつい
たのは魚をすくい取るサデ網であろう。

No.7　嫁ぐ日１

昭和43年　桜川村柏木
（現稲敷市）

嫁ぐ日にお世話になった村のお宮へお参りす
る。うちかけ姿の花嫁を、近所の女性たちが
祝福している。



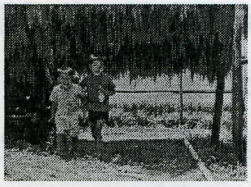
No.8　嫁ぐ日２

昭和43年　桜川村柏木
（現稲敷市）

山羊は水郷地方でよく飼われていた。乳が貴
重なミルクとなった。

No.9　嫁ぐ日３

昭和43年　桜川村柏木
（現稲敷市）



No.10　なかよし

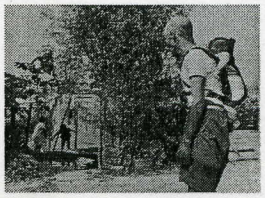
昭和48年　佐原市多田島
（現香取市）

オダの下をくぐるのは、仲良しな兄弟であろ
うか。弟は裸足である。

No.11　農繁期１

昭和43年　佐原市篠原新田
（現香取市）

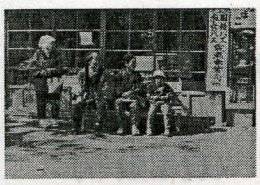
脱穀の作業場近くで雑誌を読みふける子供た
ち。耕運機牽引車の手すりに上っているのは
末の弟か。脱穀機を動力は耕運機のエンジン
である。



No.12　農繁期２

昭和42年　佐原市中洲
（現香取市）

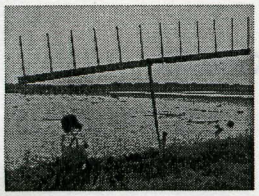
農繁期の子守は年寄りの出番となる。赤ん坊
を背負い上の姉妹に目配りしているようだ。
場所によっては臨時保育所が設けられた。



No.13　バス停

昭和39年　東村西代
（現稲敷市）

国道125号線を国鉄バスが土浦・佐原間を結んでおり、51号線を佐原と牛堀・鉾田方面を参宮バスが結んでいた。参宮バスは昭和40年に常総筑波鉄道と合併し関東鉄道となる。西代は51号と125号の分岐点にあたる。



No.14　ひとりぼっち

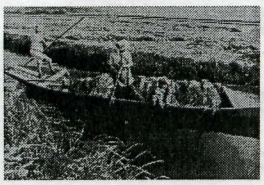
昭和47年　桜川村須賀津
（現稲敷市）

田のくろで田植えを見ている子供。家で留守番するより田で遊びながら待ってる方がよかったのだろう。親につれられて田んぼへ行き、その姿を見ながら子供達も自然と作業も覚えていった。

No.15　舟で遊ぶ

昭和43年　佐原市
（現香取市）

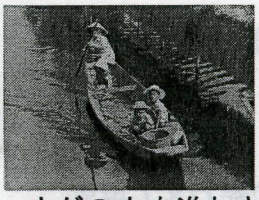
舟は子供たちの格好の遊び場となる。この舟はトダテと呼ばれる生け簀を備え、先端部分には板が張ってあり、投網などが出来るようになっている。



No.16　舟の家族

昭和45年　佐原市多田島
（現香取市）

孫を連れてエンマを行く老夫婦。おばあさんの背中には乳飲み子がいるらしく、哺乳瓶と魔法瓶も見える。これから稲を架けに行くところ。



No.17　孫といっしょに

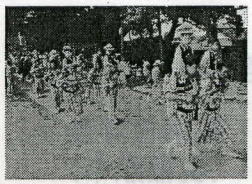
昭和43年　佐原市附洲付近
（現香取市）

オダの中を進むさっぱ舟は、子供らがヤカンを持っており、これから田んぼの休憩場所へ届けるところか。舟はの操作は「棹さき三年、櫓は三月」といわれるように棹のほうが難しく、嫁が最初に覚える仕事は棹の使い方だった。

No.18　まつりの日１

昭和51年　潮来市延方

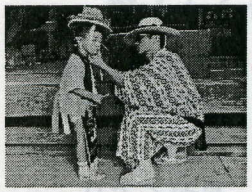
潮来市延方の鹿嶋吉田神社での相撲祭り。寛文12年（1672）に近隣の村との争論に勝訴したことを契機に始まったと伝えられる。茨城県無形民俗文化財。



No.19　まつりの日２

昭和51年　潮来市延方

延方相撲では、３～７才の男児を花相撲の力士とし、父親の肩車で社前へと繰り込む。



No.20　父と子
（まつりの日３）

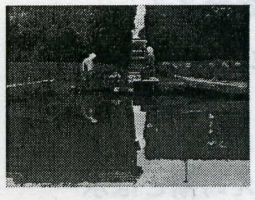
昭和51年　潮来市延方

花相撲の力士たちは花笠を被り、腹掛け、化粧まわしを着ける。化粧まわしはこの晴れの日のために、四股名を入れて特別にあつらえたもの。

No.21　満員

昭和42年　佐原市中洲付近
（現香取市）

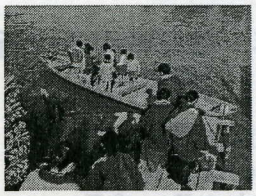
田植え支度をして田んぼへ向かう。それぞれ手に持つのは弁当か。この一艘に17人乗っている。



No.22　水辺

昭和43年　佐原市中洲
（現香取市）

屋敷裏のエンマは洗い物には便利な場所で、簡単な作業場所が作られていた。一輪車で運んできたのは泥つきの大根だろう。



No.23　渡し場

昭和41年　東村横利根川
（現稲敷市）

女の子達の髪型はおかっぱ頭が主流だった。左下に積み上げられているのは燃料の薪である。

No.24　じいちゃんの店

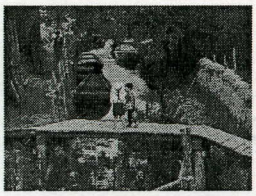
昭和45年　江戸崎町椎塚
（現稲敷市）

日用雑貨など何でも扱う店で、カップめんや接着剤、それに面子や酢イカなどの駄菓子類も見える。

No.25　至福のひととき

昭和49年　桜川村浮島
（現稲敷市）

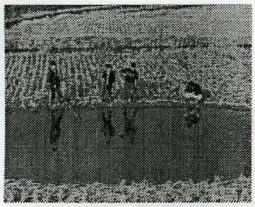
農作業の合間に、嫁いだ娘が見せに来た初孫を抱く。



No.26　トントン橋

昭和43年　佐原市向津
（現香取市）

幼稚園帰りの子供が渡る橋は、舟がくぐり易いように橋桁が少し高くなっている。



No.27　ぼくらの釣り場

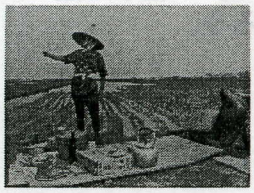
昭和41年　潮来町
（現潮来市）

冬の水路で釣りする子供たち。足もとにある缶は餌のミミズなどが入っているのだろう。

No.28　「秋」獲り入れを終えて

昭和53年　佐原市多田島
（現香取市）

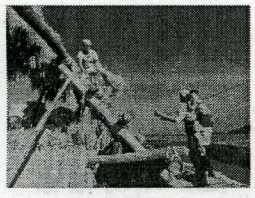
中央上部の田んぼ中には、盛り土をして造営した家の墓が見える。田植え時期とは水量がかなり異なる。



No.29　「オーイいっぷくだよー」

昭和42年　佐原市中洲付近
（現香取市）

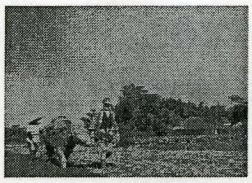
田植え時期など農繁期は、休憩・昼食は野良でとった。右に積んであるのはこれから植える苗の束で、現在よりも丈の長い成長した苗を植えていた。



No.30　稲掛け 呼吸を合わせて

昭和45年　佐原市多田島
（現香取市）

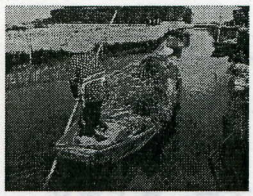
オダの上にいるお爺さんへ、舟で運んできた稲束を投げ渡す。根本を上にすると、うまく投げられた。



No.31　牛耕

昭和43年　桜川村神宮寺
（現稲敷市）

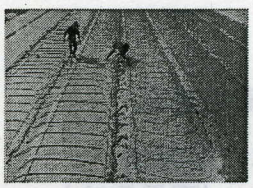
大正期から畜牛が導入される。牛は朝鮮牛で赤牛と呼ばれた。写真は台地上の畑での鋤起こし作業である。また島の方では水田まで舟で牛を運ぶため、おとなしいこの牛が適していた。



No.32　水路の秋

昭和42年　佐原市向津付近
（現香取市）

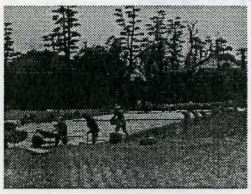
稲をオダ掛け場へ舟で運ぶ。さっぱ舟の後部に積んでいるのは、船内の水を汲み出すメンヅキである。



No.33　折衷苗代

昭和42年　東村西代
（現稲敷市）

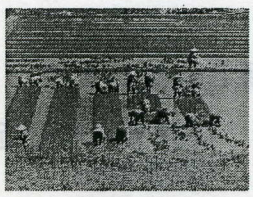
苗代は当初は水苗代だったが、昭和27年頃から保温することで苗の成長を促す折中苗代となった。その頃は燻炭と油紙で保温していたが、同32年頃からはビニールで覆うようになる。写真は種を蒔き終えた苗床での、ビニール架けの準備である。



No.34　総出の種蒔き

昭和42年　東村脇川
（現稲敷市）

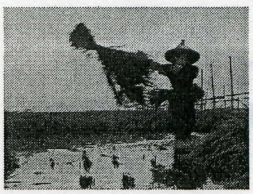
種籾を苗代田に蒔いている。一輪車近くの二人は、コロガシで種籾を押さえている。



No.35　総出の苗取り

昭和50年　東村阿波崎
（現稲敷市）

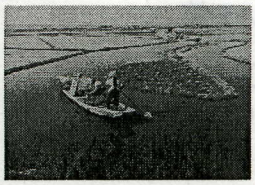
苗を数百本集めては、わらで結わえて苗束を作ってゆく。わらを腰にくくり付け、ボッチ笠を被る女性達は、当家のほかに結いとして手伝ってくれる親戚・近所や、賃金で働きを頼んだ人などであり、短冊状の苗床がどんどん小さくなってゆく。



No.36　台風去って

昭和43年　佐原市篠原新田
（現香取市）

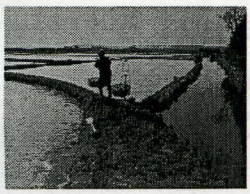
台風の後の冠水は例年のことであった。倒れた稲は後ろから刈ってゆく。腰には稲束を結わうユッツォ（結緒）の束を括りつけている。



No.49　「春」水豊か

昭和52年　佐原市多田島
（現香取市）

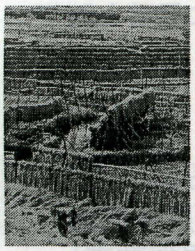
水を湛えた水田とエンマの境界は僅かな畦だけとなり、波を立てぬよう操船にも気を遣う。田起こを終えた中央の小島も、水田として利用される。同じ場所を写した他の写真と比べると、水量の違いが良く分かる



No.50　畦道

昭和43年　佐原市多田島
（現香取市）

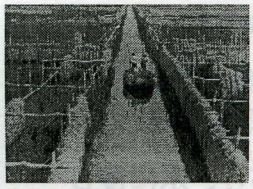
天秤棒に苗籠を下げた農夫。水田は代掻きが済んだ状態で、明日にも田植えが始まりそうである。写真中央の水田は、水口を板で補強した水車の取り付け場所である。



No.51　稲架襖（はざぶすま）

昭和42年　佐原市大倉新田
（現香取市）

稲刈時期には干した稲が壁のように続き、舟からは周りの景色が見えなくなる。まるで襖で囲まれたような状況になる。



No.52　稲架襖の中を行く

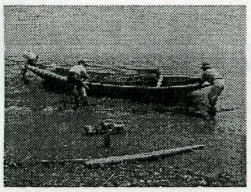
昭和44年　佐原市篠原新田
（現香取市）

稲を満載して、これから家の近くのオダに掛けに行くところか。

No.53　オダ（稲架）材

昭和40年　佐原市多田島
（現香取市）

千葉・茨城周辺では稲干し用の棹棚をオダという。田の近くに組むことが多く、材料のタケや杉丸太などは隅に積んでおく。



No.54　川えび漁

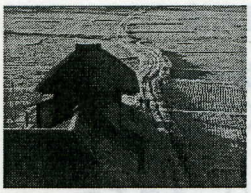
昭和45年　東村利根川
（現稲敷市）

さっぱ舟に積まれているのはズという漁具で、餌を入れて沈めておき、ウナギや小魚、エビなどを誘い込む。岸に置かれているのは目印の浮きと石の碇であろうか。

No.55　川に生きて80年

昭和41年　東村新利根川
（現稲敷市）

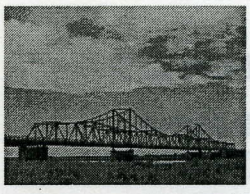
舟の前方の細い竹はツクシというウナギを獲る漁具で、それを引き上げながらの移動中である。老人の前のタテザルには何匹かのウナギが入っていることだろう。



No.56　霜の朝

昭和40年　江戸崎町犬塚
（現稲敷市）

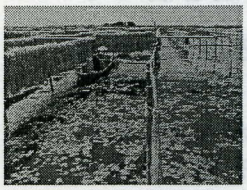
耕地整理前の大小さまざまな形の水田が続く。手前の民家は屋根棟がLの字型の曲がり屋形式である。



No.57　水郷大橋

昭和45年　佐原市利根川
（現香取市）

昭和１１年に開通し、現在の新水郷大橋が完成する昭和５２年まで水郷の玄関口としての役割を果たす。現在の橋より約３００ｍ下流側に架かっていた。佐原側の下流より撮影。



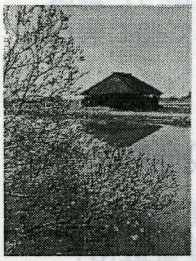
No.58　水上の稲架１

昭和42年　佐原市附洲
（現香取市）

オダの間に竹を何ケ所も渡して、倒れないように補強している。エンマにはアサザの葉がたくさん見える。

No.59　水上の稲架２

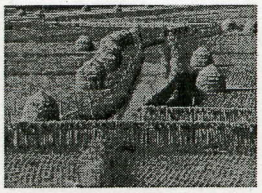
佐原市附洲
（現香取市）



No.60　ネコヤナギ

昭和42年　東村上之島
（現稲敷市）

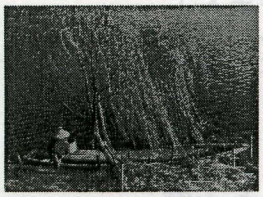
大きな納屋の茅葺屋根は、一部葺き直しがされて新しくなっている。



No.61　野ボッチの風景

昭和42年　佐原市附洲付近
（現香取市）

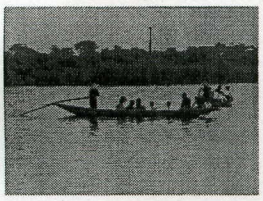
オダに掛ける乾いた稲束は、脱穀まで乾いた田に積み上げてボッチにして乾かしておく。水郷の女性が被るボッチ笠は、この形に似ているところからそう呼ばれる。



No.62　春風

昭和42年　東村水神
（現稲敷市）

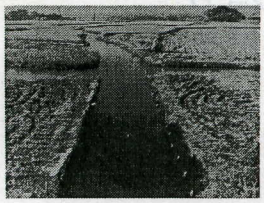
ざるの中で、何かをすすいでいる。乗っている舟の先端はとがっており、水郷でよく見られるさっぱ舟とは異なるが、その上に板を渡して作業場にしている。



No.63　舟遊び

昭和40年　潮来町
（現潮来市）

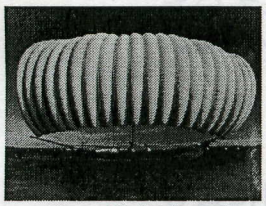
北利根川を潮来より写す。対岸は佐原市加藤洲地区で、船に乗っているのは十二橋めぐりの観光客であろう。



No.64　水の十字路

昭和40年　佐原市多田島
（現香取市）

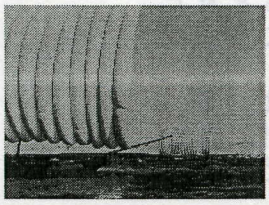
水路をエンマと呼び、大エンマ、中エンマなどが縦横に走っていた。左の田は波から畦を守るために土のうで補強してある。



No.65　輝く白帆

昭和48年　麻生町白浜沖
（現行方市）北浦

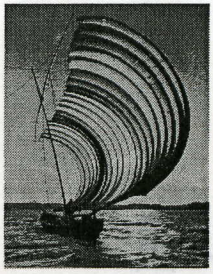
船の横幅を一杯に利用して網を広げる帆曳き網漁。シラウオ漁の効率化をねらって、出島村（現かすみがうら市）の折本良平が明治16年に開発した。その後改良されてワカサギ漁にも用いられた。



No.66　北浦の夏

昭和46年　麻生町
（現行方市）

帆曳き漁は霞ヶ浦でも行われていたが、昭和43年以降は北浦だけとなった。漁師の頭から斜め上にのびる綱はモノグサ綱といい、これを引くことで船を前後に動かすことができる。



No.67　シルエット

昭和48年　麻生町白浜沖
（現行方市）北浦

網を引く水の抵抗と帆のバランスで、船を横に滑らせる。

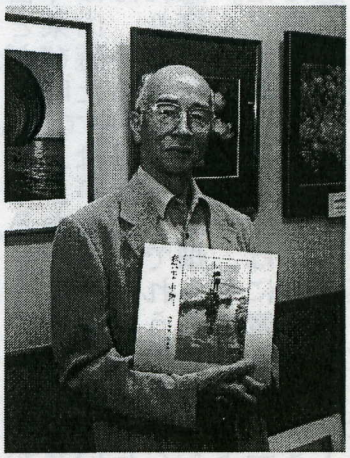
No.68　帆曳き漁師

昭和48年　麻生町白浜沖
（現行方市）北浦

霞ヶ浦・北浦で昭和40年には900艘を数えたという帆曳き船もしだいに引き網（トロール漁）に移行してゆき、現在では観光帆曳き船のみとなってしまった。

写真の解説は千葉県立中央博物館大利根分館から提供いただきました。

鴻野　伸夫氏　プロフィール



昭和 12 年　茨城県稲敷郡古渡村（現・稲敷市）生まれ
30 年　江戸崎高校写真クラブ創設
39 年　全日本写真連盟水郷支部（千葉）加入
55 年　同　茨城水郷支部設立　支部長
同　茨城県本部委員
61 年　コンタックスクラブ茨城両支部設立　現支部長
平成　9 年　茨城ハッセルブラッドフォトクラブ設立　現在　同会
13 年　日本ハッセルブラッドフォトクラブ名誉会員
二科会写真部茨城支部入会
（現在）　茨城県生涯学習指導者
写真展「想い出の水郷」を県内外１０カ所で開催

水郷の想い出

鴻野伸夫さん（69）は稲敷市の国道125号線に架かる新古渡橋近くでまんじゅう屋を営んでいる。水郷地帯で生まれ、育った。東京に1年ほど住んだ以外は、霞ヶ浦の風のにおいと水の輝きを見て今日まで過ごしてきた。仕事の余暇に始めた趣味のカメラ歴は約50年で、プロ並みの腕前だ。2002年6月に写真集「想い出の水郷」（常陽新聞新社）を出版して話題を呼び、写真展も各地で開催するとともに、講演会の演壇にも立った。写真集に収められた100点近くのモノクロ写真には貧しくも、しっかりと大地に根を下ろして生きてきた水郷の人々の暮らしぶりが活写されている。鴻野さんに、子供時代の想い出や人々の日々の営みなどを語ってもらった。

イモ蔵の隠れんぼ

母は、和菓子の製造販売をやっていた鴻野まんじゅう屋に嫁いできたが、母の実家は店から５分ぐらいと目と鼻の先ということもあり５、６歳の子供のころからよく遊びに行っていた。母の実家の家業は農業で米、野菜、養蚕などを幅広くやっていた。

近所の農家はどこの家も親類みたいなもので、子供たちも例外ではなくみんな友だちで、いろんなことをして遊んだ。隠れんぼや缶けり、魚とり、ホタル狩り、山菜とり。今考えるとたわいのない遊びだが、満足に遊び道具がなかった時代、自分たちで工夫しながら夢中で遊んだ。

隠れんぼの隠れ場は、多くが縁の下やわら小屋だったが、イモ蔵に入ったりしていたこともある。イモ蔵というのは、畑でとったイモなどの野菜が霜にやられないように入れておく貯蔵庫のようなもので、畑の中に穴を掘り、その上に三角のわら屋根を施し、柱もなく組み上げた簡単な造りだ。畳１枚ぐらいの広さで高さが１メートルぐらいだから、子供の背丈なら十分な隠れ場となった。

イモ蔵はこんもりした古墳の後に横穴を掘ったところにもあり、そこも隠れんぼの格好の場所であった。横穴には、長さが１メートルぐらいの直刀なども無造作に捨てられていた。もちろん、さびてぼろぼろだったが、おもちゃにして遊んでいた。山の傾斜地に横穴を掘ったイモ蔵もあった。

近くには造り酒屋やしょうゆ倉もあり、子供たちは、大人の目を盗んでひっそりした倉庫に潜り込み、高さが２メートルもある大きな仕込みだるの中に入って隠れたりして遊んだりした。

どの家にも台所から流れ出た汚水を流す排水溝があり、そこに山から湧き出た水も流れ込んでいた。その小川の流れをせき止めて５、６人でバケツでくみ出してフナ、ドジョウ、ウナギ、二ホンナマズ、食用ガエルなどの魚取りをした。

いわゆる、川干しである。また、小川から流れた水は貯めておく用水池があったが、そこでも同じようにして魚をとって遊んだ。

小川の水は澄んできれいだった。今のようにコンクリートの用水路でなく自然掘りだから、水草や山のわき水などでも希釈されたりしていたので水質は良く魚はたくさんいた。

楽しかった川遊び

祖父に連れられて初めて川に遊びに行った。霞ヶ浦に注ぐ小野川河口の四十石河岸に魚釣りに行ったように記憶している。家から徒歩で５分ぐらい。古渡小学校に通っていたが、生徒は１クラス５０人ぐらい。小学校の４、５年生のころになると友だちと本格的な水遊びをするようになった。

その中でも楽しかったのは、５、６人でいかだを造って小野川に浮かべ遊んだことだった。いかだの大き

さは、長さが４メートルぐらいで幅が２メートルほどだった。オダのくいや廃船の残材をそこらあたりから拾い集めてつなぎ、組み合わせてわら縄でしばり水に浮かべるという単純ものだった。農家の子供などは縄の扱いがうまく、造るのが上手だった。

小野川は深いところで４メートルぐらいあった。誤って落ちたら大変だが、いかだにはへりがないから、川に落ちても、水面と平らだから、すぐにはい上がれる構造で、安全安心だった。それにいかだは、波がきて水をかぶっても沈没しない。夏休みは当然だが、学校から帰ったら、友だちと毎日のように川に行って遊んでいた。

中学生になると、さまざまな魚釣りをして楽しんだ。フナ、コイ、タナゴなど魚の種類は豊富だった。釣り餌は、ごみ捨て湯や排水路の溝からミミズを取っていた。台所から流れ込んだ生活雑排水が溝に染み込み、それを食べて栄養分としているミミズはどこを掘ってもいた。

当時の霞ヶ浦がきれいだったのは、沿岸に住む人も少なかったが、生活雑排水をそのまま流さず、溜と溝で浄化された水を霞ヶ浦に注いでいたからだと思う。

今の釣りは、いやというほどまき餌をばらまき、だまし討ち的な釣りで、いたずらに霞ヶ浦を汚しているが、私の子供のころは堂々とした魚との真剣勝負だった。生まれた時からミミズとは友だちのような関係だから、釣り針にミミズのつけるのはみんな上手なもので、さおも篠竹を切ってきて作った。

釣り浮きも桐の木を削り、ろうを塗って、クレヨンで色を付けたものを使っていた。テグスと針だけは買った。作るのが楽しく、お互いに出来具合を自慢した。器用な奴がいるもので、いつもまねのできないような釣り浮きを作ってくる友だちもいた。

知恵の輪のような「ペコ針」

学校から帰ったら、２メートルぐらいの篠の竹に糸と針をつけて小野川の川べりに仕掛けておく。この魚とりはメチャクチャに面白かった。川の中心部は深くて船でないと入れないので、もっぱら川岸でやる方法だ。糸の長さは 50 センチほどで餌は太いボウタラミミズ。川の中に流しておくだけという簡単なものだが 10 本ぐらい仕掛けておく。

仕掛けはこうだ。1.5 メートルぐらいの篠の棒に釣り糸に「ペコ針」を付け、生きたトノサマガエルを餌にする。ペコ針は知恵の輪のような形をした針だった。どうして「ペコ針」と呼ぶようになったのか分らないが、針の形が不二家のアイドルの舌を出したペコちゃんと似ていたからかも知れない。

川岸のマコモやヨシを１メートルぐらいの広さに刈り、生きたトノサマガエルを尻から針に刺したさおを浮かしてペコ針を１０メートルぐらい間隔ぐらいに一晩仕掛けておくと、カエルが泳いでいるところに夜行性のライギョがかかる。トノサマガエルをおとりにするのだ。これは面白いように掛かった。

翌日の朝、起きたらすぐに川に走って見に行く。その時はあきらかに興奮しているが、冷静に冷静と子供なりにはやる心を静める。岸辺のマコモやヨシがガサガサと揺れ、バシャンバシャンと水音がするとしめたもの。ライギョだけでなくニホンナマズもよく掛かっていた。

友だちも仕掛けておくのだが、暗黙の了解のようなものがあり、おれの漁場はここからここまでいうように縄張りがあった。とれる魚は、１日に１、２匹だけだが、釣り上げる時はグッグッと何ともいえない手応えがあり、それが楽しみだった。

もちろんとれない日もあった。自分の仕掛けにはかからず朝寝坊して遅れた友だちのさおにかかっていて口惜しいことも何度もあったが、盗んでとるようなことはしなかった。そういう約束ごとは、子供同士の間できちんと守られていたような気がする。

また、ウナギをとるつくしの仕掛けも面白かった。イカダで少し沖に

出て針を付けた糸を先端に結びさおを逆さにさして置く。餌はボータラミミズ、水底に住むウナギをとる。毎朝４、５匹はとれたが、すでに死んでいるのもあった。それを「くくり」と呼んでいた。

とっできた魚は祖父がさばいてくれたが食べたという記憶は少ない。おそらく畑の肥やしにしたり、ネコなどにやるか捨てていたのではないか。ただ、ドジョウはどろ抜きして沸騰した鍋に入れてみそ汁にして食べた記憶があるぐらいで、あまり食べた記憶はない。食べることより魚をとるスリルを楽しんでいた。

手製の鉄砲で狩猟

小学校５、６年生のころになると遊びに知恵もつきだした。今でも作ってみろと言われれば作れるほど鮮明に覚えているのは、手製の銃を作り、火薬を利用した弾も作り、鳥を撃って遊んだことだ。

銃の材料は鉄パイプ１本と竹だった。弾は薬きょうを拾ってきて火薬を詰めて作った。薬きょうは、近所を歩き回れば簡単に拾い集めることができた。

神社掃除で枯れ葉を集めて燃していたら、不発弾が交じっていて、暴発して太ももにけがをした人もいたぐらいだ。

1945（昭和 20）年８月６日、当時としては大きな建物として目立った古渡村役場が戦闘機の機銃掃射を受け２人が死亡し、３人が負傷した。

その日は、じりじりと焼きつくような太陽が照りつけ、暑い日だった。田草とりの母に連れられて田んぼに行き、近くの小川で魚とりをしていた。

いつも遊んでいる場所なので、母から少し離れ、夢中で遊んでいた。頭上にキューンという音がすると、バリバリと何とも言えないごう音がした。小さなバケツも網も捨てて母のところへ走った。母も私の名を呼びながら迎えに走ってきた。二人で山陰のコンクリート橋の下に逃げ込み、小さくなって震えていた。

役場が攻撃され死亡した人もあったことを後で知り、震えが止まらなかった。魚とりをしていたのは役場から 300 メートルぐらいしか離れていなかった。

鉄砲作りは、空の薬きょうに火薬と弾を入れて紙を詰めるだけの簡単なもので、それをパイプに取り付け、真管には紙雷管を使い、くぎのようなものが雷管に当たるように工夫して発射した。　お尻のところにポンと当たるようにガイドをつけ、くぎにゴムを引っかけて撃つ。台座はそのへんの材木を利用した。

火薬は運動会で使うピストル弾の紙をはがして集めた。友だちの１人は、はがして粉状の火薬をもっと細かくして粉のようにしようと、つぶしながらかき回した。そこで発火してけがをした。鍛冶屋のせがれだと思うが、家に道具があったせいか精度の高いのを作っていた。

試射をすると、トタン板を抜くぐらいの威力があり、殺傷力は十分にあった。子供の知恵というのは、どうやって付いていくものか。銃作りなどは、誰に教わったという記憶はない。

ただ、友だちと遊んでいるうちに、それなりの工夫をして、今では考えられない危険な道具を作りだしては、平気な顔をして遊んでいた。

終戦近くになると、米軍の飛行機から銀色のテープが無数に落とされた。後で聞いたことだが、日本軍の電波通信を妨害するのが目的だったらしい。それを高学年の子が拾って来て見せびらかす。欲しくてたまらなかった。

松の木の高い枝にキラキラ光っているのを見つけ、急な斜面をはだしで駆け上がった時に篠の切り株を踏み抜いてしまった。鎌で斜めに切り取った篠の株は鋭かったので出血が止まらず、傷口を押さえて泣いていると近所の女の人が助けに来てくれた。

その松の木といえば太さが１メートルあまりで高さが 10 メートルもあり小学 1 年生の子供には登れるはずもなかった。

野鳥と山菜とり

私が得意としていたのは「バッチメ」という方法でスズメをとることだった。

仕掛けはこうだ。アミに弓を張り、鳥が餌を突付くとアミがバタンと倒れてかかるという単純なもので、餌は稲の穂などを使った。面白いようにかかったが、研究もした。弓の張り方、餌の落ち具合とか、子供なりの知恵を絞り工夫した。

「バッチメ」には、ホオジロとアオチがよくかかった。スズメは利口なのか、なかなか掛からなかった。この方法は空気銃で撃つように鳥に傷を付けないでとれたから買ってくれる人もいた。近所にホオジロを飼っているおじいさんがいて、持っていくと喜んで、ちょっとした小遣いをくれた。ホオジロは良かったが、アオチは鳴き声がよくないのか人気はなかった。

カスミ網も仕掛けたが、これは種類を問わずいろんな鳥がかかった。捕獲の最大の目的は小遣い稼ぎができるホオジロだった。そのため、ホオジロの寄りそうな所にカスミ網を張るわけだから、当然のようにカスミ網にかかるのはホオジロが多かった。慣れてくると、ホオジロの渡りの場所が、自然と分かるようになった。

山菜とりは、ワラビとかキノコが多かった。家の周りにある山の状態は子供のころから歩き回ってよく知っていたから、どこにいつごろ行けば、何がとれるかというのを体で覚えていた。キノコはたくさんの種類があった。とってきたキノコは家に持ち帰り、味噌汁などにして食べた。毒キノコなどは、大人が見分けてくれたと思う。

しかし、ゴルフブームで山の開発が進み、ゴルフ場ができてから山菜とりは駄目になった。次々とゴルフ場がオープンすると、自然と山に入る人もなくなった。今では、山掃除をする習慣がなくなったこともあり、すっかり荒れ放題になった。

ほかにも、トンボやセミなどの昆虫採集をして標本を作ったり、カエルを解剖したりと四季折々の自然を相手に夢中で遊んだ。ホタルをとってきて黄色い光を放ち明滅しながら蚊帳の中で飛び交うホタルを団扇（うちわ）で追いかけ回った思い出など、今の子供たちにもやらせてやりたいぐらい楽しい遊びだった。

田んぼで〝ドジョウブチ〟

夜になるとホタルとりだけでなく「ドジョウブチ」という魚取りとりもやった。時期は、田植えが終った5、6月ころで、苗の根が座り、田んぼに少しの水を張った状態が最良とされた。

ドジョウブチの道具は、くしのように20本ぐらい針を植えてあるドジョウ針とカンテラにバケツを持って夕方になると出掛けた。

仲の良い友だちと5、6人でつるんで行くことが多かった。明かりのカンテラはマツの根っこを燃料とした。これはすすが大量に発生し、松やにのにおいがする。そのすすが顔に付着して「ドジョウブチ」が終わるころには顔が真っ黒になった。お互いの顔を見合わせて大笑いをするのが常だった。カーバイドが普及すると自然と松根油は使わなくなった。ドジョウの習性は夜になると動かないで浅い田んぼの中でじっとして眠っている。それを見つけてはドジョウ針をブンと打つ。

これはなかなか忙しい作業だった。片手にカンテラとバケツを持ち、利き手にはドジョウ針を握っている。3つの用具を一緒に持っていることになる。

その3種の神器を持って、暗くて細いあぜ道を歩くのだからバランスを取るの難しかった。弟でも入ればバケツぐらいは持ってもらったが、ほとんど一人でやった。大人もやっていたが、子供でも一晩でバケツ半分ぐらいはとれた。ドジョウブチのコツは、ドジョウ針を真上から打つのではなく、眠っているドジョウのやや斜めから打つとよくとれた。

「おっかぶせ」という魚取りもやった。これは底の抜けたザルかごを使用する。昔は堤防がなかったから

大雨になると、霞ヶ浦の水が田んぼに逆流し、一緒に魚ものぼってきた。そこで、田んぼの水が引くのを合図のように「おっかぶせ」をやった。田んぼや小川でもやった。増水すれば子供たちは喜んだが農家は大変だった。

台風といえば、私の家は高台にあるため水に浸かることはなかったが、後ろの山が崩れることがあった。小野川沿いの古渡の商店街は、土浦市内と同じように浸水して被害を出していた。祖父の実家がその商店街で医院を開業し、川の淵に２階建ての家があった。台風の後、親は「片付けを手伝いに行ってくるよ」と言って出掛けたのを覚えている。

私は子供だったので連れていかれなかったが、２階まで浸水していると聞いて、２階から魚を釣ったら面白いだろうなと思った。

人気のあった湖水浴場

家から、湖水浴場で一番近いのは古渡の橋が小野川と霞ヶ浦の境目になる、霞ヶ浦に入る河口にあった堂崎の鼻だった。家から子供の足でも7、８分の距離にあった。湖水浴場は堤防もなく、２００メートルぐらい沖まで遠浅での砂浜が広がり、背後には松林が広がっていた。堂崎の鼻は近隣の水泳場として人気があり、遠くの阿波や神宮寺の集落の子供らも歩いてきていた。

プールのない時代だから、堂崎の鼻の湖水浴場は学校の水泳教室にも使われていた。遠浅といっても、場所によっては大人でも立てないほどの深い所もあったが、ほとんどは大人の胸ぐらいで１メートル 50 センチぐらいだった。麻生の湖水浴場によく似ていた。

小学校２、３年まで素っ裸で泳いだ。松林の中で衣服を脱ぎ、松の枝にひっかけてそのままドブンだ。素っ裸でも恥ずかしくなんかなかった。子供たちは、誰に習うこともなく、泳ぎは自然と覚えていた。

一番面白かったのは、素潜りでいかに長く水中を泳ぐことができるかという競争だった。岸辺に係留しているサッパ船の下を何艘（そう）まで潜れるかというものだ。潜っている途中に苦しくなり浮き上がって船の下にぶつかると、体が船底にくっついて離れない。そしたら浮き上がれずに死んでしまうという大変危険な遊びだった。

大人からは「それだけはやるな」と言われていたが、子供の冒険心は、注意されればされるほど好奇心を持つものだ。２艘までは大丈夫だが３艘となると勇気がいった。

堂崎の鼻では、騎馬隊の水馬演習が行われていた３、４歳のころ、祖父の手を握りしめながら見ていたことをよく思い出す。はっきりしないが、千葉に駐在していた陸軍が、水の中で馬を扱う訓練で、水しぶきをあげ馬が跳ねていたような記憶がある。千葉には御陵牧場もあり馬の産地で連隊もあったから演習に来ていたのかも知れない。松林の中では、兵隊さんが上半身裸で寝転がって休んでいたり、馬が草を食んでいたり、のどかな光景だった。

夕方近くになると、水馬演習を終えた兵隊さんが馬に乗り、隊列を組んで砂利道を踏みながら帰る時のひずめの音が、今でも耳に残っている。

ランチ（蒸気船）の思い出

美浦村の大山に海軍航空隊があり、そこの兵隊さんが古渡にも下宿していた。古渡から大山まで、霞ヶ浦を利用したランチ（蒸気船）が運航していた。兵隊さんの朝夕の出退時間が近づくと、祖父に連れられて、その送迎風景をよく見に行った。

ランチは、小野川の河口から鳩崎を通って大山へ行くコースで、いつも 30 人ぐらいの兵隊さんが、白い制服を着て乗り降りしていた。私は祖父にランチの汽笛のまねをしてみろと言われ、「トポッ、トポッポー」と小さい口をすぼめて口まねをした。祖父は「うまい、うまい」とほめてくれた。

古渡の集落には、独身の兵隊さんの下宿だけでなく、一軒家を借りた夫婦連れもいた。後で知ったのだが、下宿先の娘さんが、兵隊さんをお婿さんに迎え、戦後も暮らしていた人

もいた。大勢の兵隊さんを迎え、古渡の商店街もにぎやかで遊郭もできていた。

戦時中、堂崎の松林の中には、霞ヶ浦航空隊の練習機の赤トンボか分からないが、５、６機の飛行機を隠してあった。終戦になっても練習機は松林の中に放置されたままになっていた。

戦後の物資不足が続き、集落の人たちにとって飛行機は格好の落し物で、格好の拾い物となった。飛行機からジュラルミンの板などはがして持ってきて、自分の家の腰板にしたりするなど、使えそうなものは飛行機から根こそぎはがされていった。多分、父が復員して来た年だから1946（昭和 21）年の夏ごろだったと思う。

父は、飛行機のアングルを持ってきて、畑の豆を打つ道具の「くるりん棒」の代わりに使っていたが、思ったほど具合が良くなかったようで、あまり使わないまま、いつの間にかなくなっていた。ただ、エンジンフレームは、和菓子づくりに使う大鍋をかける台として長く使われていた。

使い物にならず不要となった部品などの廃材は古渡橋から捨ててられた。そのため、大人からは「ジュラルミンが沈んでいるから、橋の上から川に飛び込むな」と注意されていた。それでも、橋の欄干から勢いよく飛び込んで、足をけがした同級生もいた。

夏祭り、盆綱のにぎわい

夏のお祭りで最高に楽しかったのは「古渡の盆綱」と呼ばれた綱引きだった。

古渡の町内の上宿と下宿に分れ、双方で綱引きをする行事だ。これは、上層が勝てば豊作、下宿が勝てば豊漁という言い伝えがあった。

綱引きに使う盆綱は町内で別々の場所で作るのだが、材料のわら集めは子供たちの役目だった。夏休みになる前ごろから、小学生の子供たちは 10 人ぐらいのチームを作り、日曜日になると「盆綱のわらくろよ」「わらがなければ銭くろよ」とはやしながら、集落を練歩いた。

がき大将が御幣旗を自慢げに持って先導して行く。もらったわらを運ぶリヤカーを引きながら古渡から阿波や三次までの４キロ先ぐらいまで歩く。

わらのない家では「家はわらがないから」といって 10 円、20 円の小銭をくれた。農家ではわらを 10 束ぐらいくれ、集めたわらを納屋に積んで置くまでが子供らの仕事だった。

祭りが近づくと納屋に保管していたわらを取り出し、集落の男衆総出でよることになるが、これが大変な作業だった。なにしろ盆綱の太さは直径が 40 センチぐらいで長さが 100 メートルぐらいになるのだから、一筋縄ではいかない。

もちろん、細い縄からよるのだが、ある程度の太さになると、高い木の枝に３本ぶら下げ、さらに寄り合わせ太くしていくのだ。この時、1 本ずつの縄に若い衆がぶら下がって、交互に回りながらよることから、これを称して男衆は「人間縄なえ機」と呼んでいた。縄と人間がぐるぐるとぐろを巻くように回ってよるのだから、ぴったりの呼称だった。

盆綱をよる場所は、上宿が須賀神社で下宿が智福院というお寺の境内で行われ、盆綱をぶら下げてよるにはちょうどいい枝ぶりの大木があった。

完成した盆綱は太すぎて、とても人の手で握ることができないから、さらに盆綱に金魚のひげのように何本も細いひさ綱を付ける。その細いひさ綱に子供でも大人でも群がり両方で綱を引き合うのだ。たいした娯楽のない時代。１年１回の夏祭りの「盆綱」は、活気に満ちあふれて大人も子供も楽しんだ。

竜が舞うような盆綱

盆網作りが終わると、神社や寺の境内から若い衆がズルズルと道路を引きずって祭会場に運ぶのだ。会場といっても 125 号の国道だが、そのころはのどかで交通量も少なく、トラックやバスなども通らず、大騒ぎするような交通規制などしなくてもよかった。ちょうど、T 字路の酒屋

の角が境目だった。綱引きは盆の14、15日の２日間行われた。

14日の初日は、本番に備えたリハーサルのようなもので、誰も本気でやらなかった。本番は15日の夜だ。近在から大勢の人が祭り見物に集まってくる。薄暗い古渡橋の上は若い人たちの格好のデートスポットであり、子供たちも遊ぶのには好都合の場所だった。

綱引きの本番が開始されると会場は熱気で包まれ、綱引きが佳境に入ると、勢いあまって子供なんか吹っ飛ばされてしまうから危険だった。みんなで綱を引く光景は、まるで大蛇が道路を踊るように綱がのたうち回る。

お互いに引き合っても勝負がつかない時は、仕切り役がナタで切り、痛み分けのような形で両方が別れた。切られた盆綱は、片方の宿は橋の上まで持って行き、橋の欄干に太い縄を乗せて、「えんやー」の掛け声で一斉に古渡橋から小野川に投げ下ろす。

一斉といっても、どちらかで遅い方や早い方がでるから、盆綱はシュルシュルと舞うようにして川に落ちる。暗い水面に水飛沫（ひまつ）が上がり、盆綱は竜が泳ぐように見える。その迫力は、子供の日には驚きと感動でいっぱいだった。

翌日になると、子供たちが、川の中に浮かんでいる盆縄の上に乗って飛び込んだりして遊んだ。盆綱は水の上に浮かんでいて、1年ぐらい沈まなかった。今考えるキ盆綱は沈んでから魚の漁礁にもなったようだ。

この盆綱はＮＨＫアナウンサーの宮田輝がラジオ中継に来たことがある。私はその時、東京で下宿していたから見なかったが、それぐらい全国でも珍しい盆綱の祭りだった。古渡橋から、竜が舞うようにして飛び込む盆綱の姿は迫力があり、今でもまぶたに焼き付いている。

その盆綱の行事もいつのまにか中止となった。理由は、わらを集めたり、人を集めたりするのが困難になったからだ。その後、教育委員会で復活を計画したが、やはり実現しなかった。

パリパリと蚕時雨

母の実家が農業をやっており、養蚕の繁忙期には家族総出で働いた。それでも手不足で、その時期になると母と一緒に手伝いに行った。夜なべ仕事が続き、寝床をとる間もないから、よく母と蚕棚の下で寝た。

夜中でも蚕は桑の葉を食べているから、パリパリと桑の葉を食べる音がする。ある人に聞いたのだがこれを蚕時雨（こしぐれ）というそうだ。私も俳句をやっているので分るのだが実に美しい言葉だと思った。その話を聞いて、あの時の蚕が桑の葉を食べる音がよみがえってきた。このあたりの農家ではどこでも蚕を飼っていた。

蚕から繭ができるまでの過程は①ふ化②飼育③上族④収繭となるが、繁忙期というのは「上族」のことで「おこさま上がり」と言っていた。蚕は糸をつくる時、桑の葉の中で糸をまき始める。そこで急いで「まぶし」（ボール紙などを井桁に組んで区画したもの）に移さなければならない。

「おこさま上がりだ」と声がかかると、上がりの蚕をお盆に入れて運び出し、まぶしにならべる。これが一番忙しく、近隣の人から商店の人まで手を借りる。女将（おかみ）さんとかサラリーマンまで総出だ。「おこさま上がり」の時、どこの蚕農家でも活気に満ちあふれていた。

蚕が繭を作ってから三日ほど経つと繭の中でさなぎになる。そうするとまぶしから繭を取り出して出荷となり、蚕ができあがると集荷場まで運んだ。後は、専門業者が買い付けに来ていた。

蚕の出荷が終わると農家ではたくさんのごちそうが出た。ぼた餅もその一つだったが、子供のころ食べてお腹をこわしたり、母の実家に行くと孫が来たからと歓迎され、「ごちそうを食わせてやる」と、ぼた餅をたくさん食べさせられたせいか、高学年になるころに嫌いになっていた。「おこさま上がり」の後、小遣いがもらえるのも楽しみの一つだった。

農家では、肉や魚はそんなに食べ

思うが、母の手伝いで、一緒に野良仕事に行った時だ。田んぼのあぜ道でばったりとマムシと出くわした。母は、「逃げるんじゃない。マムシを見ていろ」と言う。そうするとマムシも逃げないでじっとしている。母はどこからか竹を拾ってきて、カマで竹を割り、その竹を素早くマムシの頭にはさみ込んで捕まえるのだ。

母は、マムシの頭をたたいて殺すと、まるで手品のようにマムシの皮をひんむく。そして、竹に結わえ付け、誰がどこから見ても分るようにあぜ道にさし、死んだマムシをぶら下げて置くのだ。　それは、その後に野良仕事に来た人に注意を促すためだ。マムシを見つけたら必ず捕まえて殺す。マムシは毒を持ったヘビで危険だということは、先祖代々から集落の人たちに言い伝えられ受け継がれていたからだ。

母から聞いた話だが、母の弟が外で遊んでいてマムシにかまれたことがあった。その時、祖母は持っていたカマを火であぶり傷口を少し切って、かまれた傷口に口を当て血を吸い出してははき、吸い出してはいた。それが終わると手ぬぐいで傷口をきつくしばって医者に連れていった。それで、弟は一命を取り留めたという。

そのころの女の人というのは知恵もあったし、勇気もあった。救急車もなく血清が届くまでは何時間もかかった。カマを火であぶる。痛がる子供をみんなで押さえる。祖母は、助けたいという一心から血を吸ってははき、吸ってははき、毒を取るという応急手当して、医者に運んだ。

これは、身内の話だけれど、当時の女の人は知恵もあり、そして強かった。今なら、ゴキブリを見ただけで大騒ぎするが、当時の女の人は、いつも自然と闘い、自然の恵みに感謝しながら生きていた。

どこの農家にも焼酎漬けしたマムシの瓶が台所の隅に置いてあった。焼酎の中に入れ精力剤として飲む人もあり、薬としても使用されハチやムカデに刺されたら、患部に塗ると治った。また、マムシは焼いて食べるとおいしいと言って口にする人もいた。

マムシだけでなくアオダイショウ、ヤマカカジ、シマヘビなどたくさんいた。アオダイショウは鶏小屋に卵を飲みに来ていた。

昔は、小野川でシマヘビが悠々と泳いでいたが、最近は見なくなった。

写真への道

写真を覚えたのは中学３年のころだった。担任の先生が宿直の時、学校へ遊びにいくと、先生は押入れの中で暗室作業をしていた。引き伸ばし機は幻灯機を使い、壁面に印画紙を張り付け 30 秒、1 分と露光していた。それから、印画紙を現像液の中に入れ画面が現れるの待っている。その手伝いをやりながら「写真というのは、こうなのかぁー」と先生の一連の作業を見ながら覚えていった。

先生は、私らと５つぐらいしか年齢が違わなかった。高校を終わってすぐ来た若い先生で代用教員のようだった。竜ヶ崎で展覧会を開いた時に見に来てくれたが、今、同窓会をやると、どっちが先生だか分らない。写真は、当時先生が持っているリコーフレックスという二眼レフを借りて写したこともあった。

高校２年の時に初めて自分のカメラを買うことができた。カメラの購入資金は、食用蛙を売った時の金が結構貯まっていた、食用蛙は五人ぐらいの友だちと組んでとりに行っていたが、1 回売ると 1 人 3,000 円ぐらいの分け前があった。

売り込みも上手だったのかも知れないが、カメラの価格の半分ぐらいはそこから調達し、不足分は親戚の叔父や叔母さん、祖父などからもらった小遣いを貯めていたので補った。

それからしばらくして、写真の好きな先輩と同級生が 20 人ぐちい集まり、江戸崎高校写真部を立ち上げた。化学の先生も写真が好きだったので部室は化学教室を貸してもらった。化学の先生の指導で、薬品の特長や調合など科学的な基本を教わった。

最初に写真を撮ったのは、今では姿も形が無くなったが、小野川に架

なかったが、どこの家でも鶏だけは飼っていた。母の実家では、孫が来たからといって、ぼた餅だけでなく鶏もごちそうしてくれた。それはうれしいのだが、目の前で鶏が殺されるのにはまいった。血抜きのために柿の木に首をちょん切ったままぶら下げられている。ごちそうはいいけど、自分のために殺されたのかと思うとかわいそうで仕方なかった。

また、こんな風習もあった。コイを料理した後は、台所や外塀にコイの尻尾を張り付けていた。魔除けか、コイ供養のためなのか分らないが記憶に残っている。生（なま）のコイの尻尾を張り付けているだけだから、乾けば落ちてしまうが、しばらくは形を留めていた。今はそんな風習はなくなった。

干拓とトロッコ遊び

小学３、４年生のころ、店の前を走る国道 125 号線の拡張工事が始まった。道路の両側の山を切り開き、曲がりくねった細い砂利道を広げるもので、作業員はトロッコで土を運び出して仕事をしていた。

夕方になると仕事を終えた作業員は、トロッコを片付けもせずに置きっぱなしにして帰っていく。子供たちにとって、トロッコがりっぱな遊び用具になった。工事をしている道路は、高台から小野川に向かってなだらかな坂道になっている。そこで、トロッコを一番上まで押し上げ、そこから乗って勢いよく下っていくものだ。終点近くになると飛び降りるのだが、そのタイミングが何ともいえないスリルがあった。

トロッコから飛び降りると、レールをはずれたトロッコは、勢いがついたまま田んぼに突っ込んでひっくり返ってしまう。後は知らんぷりだった。翌日になると、田んぼに転がっているトロッコを作業員が見付け、「また、子供たちにやられた」といって、田んぼからトロッコを引き上げていた。どうぞ遊んで下さいとばかりに、置きっぱなしにしている大人たちが悪いのだからと、誰も悪びれることもなかつた。

しかし、一度だけ飛び降りるのに失敗して、トロッコとトロッコの間に挟まれてケガをした。それは、先に走った友だちのトロッコが途中で脱線しているのを知らずに続けて下りた時だった。上から勢いよく走り、あぶないと思い止めようとしたのだろう。止まっているトロッコに手を差し出して挟まれ爪が割れてしまった。今でも右手の人差し指に傷跡が残っている。

榎ヶ浦の干拓工事もやっていた。今、オオヒシクイの飛来地となっている稲見干拓もそうだった。山からトロッコで土を運んで堤防を築いていた。青い服を着た人たちが大勢作業をしており、山の陰に粗末な宿舎もあった。親から近づかないようにと厳しく言われていたから、遠くから作業を見るだけだった。

道路が完成すると、佐原から江戸崎まで鉄道省の木炭バスが走るようになった。バスは、馬力が弱いのか、坂上あたりで力つきて立ち往生することがよくあった。運転手はバスを止めて、木炭を燃やすためにふいごを回して火力を強める。

それを合図にするかのようにして、友だち５、６人でふいごを回す手伝いに行くのだ。木炭が勢いよく燃え出して走ると、そのお礼に無料で江戸崎の停車場までバスに乗せてもらった。もちろん、帰りは歩いて戻ることになるが、子供は滅多にバスに乗る機会もなかったので、大喜びでふいご回しを手伝ったものだ。

マムシの教え

本業はまんじゅう屋だが、半商半農の生活で、田んぼもあり米も作っていた。母は腰までどぶどぶと田んぼに浸かって田植えをしていた。どの家も戦争中に米のない苦労をしているから、少しでも米を作ろうという気持ちが強かった。

昔は、集落の田んぼはどこも泥田だった。体が埋まるほど深い田んぼだと底に太い竹を沈ませ、その竹の上を渡りながら作業をしていた。水と泥の闘いという稲作りで、子供ながら農業は大変だなあと思って見ていた。　小学５、６年生のころだと

かる旧古渡橋で、橋の下からあおって写した。ほかには、高校のクラブ撮影会で、同級生の女学生らを芝生に座らせて撮ったりして楽しんでいた。

大学受験を控えた高校３年の時、怖い先生がいて、「おまえ、そんなことをやっていたら大学に受からないから、カメラをおれに預けろ」と取り上げられた。そのため、高校３年の後半は写真をやっていなかった。

浪人をして、翌年の大学受験を目指して東京に下宿している時、父が病気で倒れた。祖父が「長男だから帰って来て商売を継がなければならないだろう」と諭された。父は「商売をやらなくてもいいから、好きなことをやれ」と言って励ましてくれたが、いつまでもわがままを通すことはできないと思い、大学進学をあきらめて帰郷した。

写真の作品性を追求

仕事の合間を見ては、店の近辺の風景や家族の写真を撮って楽しんでいた。本格的な作品としての撮影を始めたのは、千葉県佐原市に朝日新聞社の全日本写真連盟水郷支部が発足し、写真をやっている友人の誘いで入会してからだった。

それがちょうど、1964（昭和３９）年で、東京オリンピックが開催された年だった。店の前の国道 125 号線を県内の聖火リレーが通過することになっていた。それなら、中継地点の神宮寺を皮切りに、各中継地点に照準を合わせて写真を撮ろうと決めた。今でも、その写真は記録として残っているが、そのころから写真の作品性を追求するようになった。腕を磨くこともあったが、写真を楽しもうと全日写連の写真撮影会にはよく参加した。東京の数寄屋橋にある朝日新聞東京本社前に集合し、バス４、５台に分乗して各地で行われる撮影会に参加した。モデルだけでなく近辺の風景写真なども多く撮った。

佐原市は千葉県だから遠く感じるが、店から車で 30 分ぐらいで行けた。会員は 20 人ほどだった。写真例会が毎月 1 回開催されるので、そこに出品するためにその素材を求めて水郷の田園風景なども撮るようになっていた。写真記録として残そうという意識はなく、月例会で発表するために、近辺の田んぼの中を歩いて撮った。

例会には風景写真家の島田謹介先生が講師として出席し、いろんなアドバイスをしてくれた。島田先生は長野県の出身で、武蔵野や安曇野の風景写真を撮り写真集も出している。

島田先生が霞ヶ浦を撮った写真で特に印象に残っているのは、霞ヶ浦の帆引き漁が全盛期のころ、撮影旅行で土浦から潮来に向う定期船の上から撮った帆引き船が群れをなして操業をしている写真だ。揺れる船の上から撮るのは、カメラぶれを起こしやすいが、押し寄せてくる帆引き船を真正面から撮った迫力あるカラー写真だった。

島田先生を車で佐原や潮来をよく案内した。その時、島田先生は、ぼっち笠の話をしていた。「この格好をしたぼっち笠はここだけなんだよ」と、珍しがっていた。

私は子供のころから農家の人は、みんな、ぼっち笠をかぶっているのを見ているので、特に珍しくもなかった。島田先生に言われて改めてぼっち笠を見るようになった。夕暮れ時にエンマをサッパ舟を漕いで家路に向うぼっち笠をかぶった農婦のシルエットは、実に絵になる風景だった。

ぼっち笠を被る風習があるのは、西は新利根町の太田までで、東は潮来と麻生。木原まで行くとなくなり、南の千葉の九十九里にはあるが、これは漁師がかぶっていた。それに編み方も少し違う。水郷は折り返しの余分なところは内側に入っているが、九十九里は折り返しがなかった。編み笠を作る場所や気候の違いなどによって微妙に異なり、ぼっち笠は興味深いものがあった。

農家の嫁入りとぼっち笠

ぼっち笠は民俗学的にいうと、農家の女の人の命と言われている。農家の女性の象徴で、嫁ぐ時に必ず持参した。古渡周辺の風習として、嫁

入りの順序は次のようになる。
嫁入り先の玄関前の庭に一つかみした稲わらの中央に白紙で巻き、その中央部を紅白の水引で結んだものを置いておく。嫁が玄関に入る時、このたいまつを二本用意し、穂先に火をつけ、燃え切らないうち地面にX字に交差して重ね、その上をまたいで通る。
これは全身を清める習わしとされるものだ。そこを通る時に付き添いの人がぼっち笠を嫁の頭の上に被せるまねをする。　また、葬式の時は、ぼっち笠を棺の上に乗せる。これは農家の嫁になり、農家の嫁で一生を笠で終わったということを表わしている。農家から商家に嫁いできた私の妻もぼっち笠、前掛け、かすり、手差し、タモンピキの、農作業の衣装一式を持って来た。
それぐらい、ぼっち笠は、女性にとって重用な意味を持っていた。また、農作業する時、ぼっち笠のひもを取り替えることによって、彼女らはおしゃれを競いながら楽しんだ。

写真の月例会に出品するために家の近所や、祭事などを良く撮った。自営業ということで、時間のやりくりが自由にできたことも幸いした。
農作業をしている人を撮っていると、「だんなは暇でいいね」と言われたりしたが、「お茶をやっていけ」と誘われれば、気軽にご馳走になりながら世間話に花を咲かせた。
私が写真を本格的に撮るようになった時代は、ちょうど農業の転換期にさしかかっていた。エンマにサッパ舟を浮かべコンバインを運ぶというように、道路が整備される前に、田んぼでは、機械化農業が始まっていたのだ。「やっぱり、みんな機械を使いたいんだなあー」と思いながらシャッターを切っていた。
コンバインの出始めに、旧東村で試運転があった。アメリカ式だからすごく大きいが、佐能もあまりよくなかった。こんなでかいものを使えるのかと思って見ていた。　それが今では田植え機に人が乗り、一人であっという間に作業を終わらせてしまう。こんなに、農業の近代化が進むとは思わなかった。田植えが機隙でできるなんて、絶対ないと決めつけていたので驚き以外の何ものもなかった。
日本の稲作は、何百年と人力による手作業が続いて来たのだ。戦後から耕地整理が始まり、治水整備をして霞ヶ浦を静かにさせ、用排水路ができ、田んぼから水が絞れるようになった。
そして、機械化だ。技術革新が早いというか、たった30数年という歳月の流れの中で農村風景はすっかり変わってしまった。
近代化された農業は、写真としては魅力がなくなったが、農家の人はあの重労働から解放されたのは確かだ。

農家の嫁は働き者だった

友人の母は、「水郷の思い出」の写真集を見ながら、昔の辛かった時代を思い出して泣いていたという。
農家の嫁は本当に大変だった。田植えの繁忙期に、手伝いに来てくれる人があれば、朝早く起きて苗取りをして、田植えの準備をしなければならない。「結い」(労働の貸し借り)であれば手伝いに来た人に任せればいいのだが、田んぼに行って「ここの嫁は田植えの用意を1つもしていない」と言われるのが辛い。
何より、姑の視線や世間体というものが悪い。ひと通りの苗を用意すると、大急ぎで家に戻り、朝食の準備だ。朝食が終わり、片付けが済むと昼食の準備をして、また田んぼに戻る。姑が居る家は、子守りや料理の準備を手伝ってくれるから助かるが、そうではない家の嫁は朝から晩までフル回転だ。
田植えは、ベテランの人は早くどんどん先に進む。前かがみの姿勢だから腰も痛いし、腕もしびれてくるが、嫁もそれに付いて行こうと必死だ。一応、「無理をしなくていい」とかばってくれるが、他人より遅れたら仕事が出来ないと笑われる。「結い」の中で仕事をするというのはノルマ以上に精神的な辛さも加わる。
夜になると、疲れきった腕が腫れ上がっている。枕もとに洗面器を置き、冷やしたタオルを腕に巻いて眠

ったことを思い出して、友人の母は泣いたという。

家には、深さが10メートルほどの車井戸があり、朝の仕事は水汲みから始まる。水くみは母の仕事になっていた。風呂の水も天秤棒で担いで運んでいた。雨の日など、軒下にバケツや空き缶などを置いて水をためて風呂に入れた。茅が入っていたり、草が入っていたりしたが、そんなのは当たり前だった。当時は結構、雪の日も多かったから、熱い時は雪を入れて冷ました。

浮島に住む友人のじいさんの話だが、霞ヶ浦の岸辺に樽（たる）を置いて風呂を沸かして入っていた。風呂の隣がすぐ川だから、水を天秤棒で担いで運ぶ手間がかからない。川の水は煮炊きできるぐらいにきれいな水だ。雨が降ってきたら傘をさして、風呂に入っていたという。

私が中学生のころ、車井戸から手押しポンプになり、父が井戸のそばに自家製のタンクを作りパイプを引いて、そこにポンプで押し上げ、風呂や台所まで水道を引いた。仕掛けは簡便なものだったが、母は水くみの重労働から解放され大喜びだった。そのポンプ漕ぎは私の役目で体操をやるようなもので楽しかった。

緊張の行啓カメラマン

1974（昭和４９）年９月、茨城国体夏季大会が行われ、桜川村に皇太子、美智子妃殿下（現・天皇皇后両陛下）が、稲敷市（旧桜川村）に行啓なされた。

私は記録係として村から写真撮影を委託された。その時は、かなり緊張して写真を撮った。両殿下は物静かで、飯田稔村長の案内で庁内を見て回られた。最後に役場の屋上から、歓迎に集まった村民に手を振ってこたえられた。

その後、民俗学研究者の人見暁郎先生の説明で展示資料室を見て回られた。人見先生は、自分の著書である「浮島風土記」と「提灯酒」を献上された。

３台のカメラを用意して写真を撮っていたが、美智子妃殿下は「カメラを持つ手が震えるほど美しく気品にあふれていた。ほかに週刊誌のカメラマンなども大勢きていたが、彼らの態度や服装には首をかしげたくなるものだった。私は、皇室の方をお迎えするというので、暑くてもネクタイを締めて写真を撮っていたが、彼らは破けたようなジーパンをはいて写真を撮っていた。

残暑が厳しく汗だくで夢中になってシャッターを押していた。カメラの操作はかなり慣れているはずだが、緊張の連続で細かいことを思い出すことはできない。しかし、出来上がった写真を見ると、きちっと振れているし、満足するスナップも数枚あった。これも、長年、写真をやってきた名誉みたいなもので、勲章だと思っている。

長年、写真愛好家の中でもステータスの高いカメラとして人気があるハッセルブラッド（スウェーデン製の中判カメラ。月旅行に携帯されたカメラとして有名）を使いたいと思っていた。このカメラは高価でなかなか手が出なかった。国産車からベンツに乗り替えるようなものだが、ようやく使えるようになった。それだけ年輪を重ね写真レベルも向上し、経済的にも余裕ができたということかも知れない。

ハッセルブラッドは画質の良さも優れているが、カメラをフィールドに構え、シャッターを切る時の満足感は何ともいえない。そして、シャッターを切る時のミラーアップとレンズシャッター特有のカチャという響きの音がいい。ハッセルは、決して操作性が良く、使いやすいカメラではない。すべてマニュアル操作で絞りやシャッタースピードを自分で決めなければならないが、ハッセルのカメラが使えるという充足感がある。

私が写真を始めたころのカメラと今の時代のカメラは随分と変わった。簡単に使うならオートカメラが便利だ。ただ、自動的にピントを合わせるオートフォーカスは気に入らない。これまで、フィルムカメラ一本やりだったが、今の時代、デジタルカメラも使うようになった。近代農業へ

の変化のように、写真の世界もどんどん進化している。ただ、撮るのは人間だというところがいい。

確率3割の帆引き船撮影

帆引き船は、本当は霞ヶ浦でたくさん操業している時に撮りたかったが、機会を逃してしまった。何で撮らなかったといえば、まだ写真を勉強して技術的にも未熟だった。

帆引き船は向こう岸から、こっちの岸に何百艘と押し寄せて来る。私が中学に通っているころで、とても迫力のある風景だが、いつも見慣れたもので、漁業の営みとしてしかとらえていなかった。

私が本格的に写真を始めたのは、1960年代だが、そのころ、霞ヶ浦では麻生の6捜しか残っていなかった。12月の寒い時期、浮島にいる友人の漁師の船に軽い気持で乗せてもらって撮影に行った。そしたら、波飛沫（しぶき）がカメラにかかり凍って撮れない。それまで、船の上から撮影するという経験がないのが失敗だった。何枚か撮ったが、それが霞ヶ浦で帆引き船を撮った最後の写真となった。

帆引き船を本格的に撮り出したのは北浦だ。そのころ、北浦には帆引き船が30艘ほどあった。友人と何回か行っているうちに、行方市（旧麻生町）白浜に住む帆引き漁師の故大原　清さんと知り合いになった。

大原さんは「今日、風のあんばいがいいよ」と電話をくれる。私は車を1時間ほど走らせて現場に向う。しかし、運が悪い時には到着すると同時に風が止んだりする。もちろん、漁師は操業をしていない。連絡を受けて出向いても3割ぐらいの確率でしか、帆引き船の写真を撮ることが出来なかった。

大原さんは、ベテランの漁師で土地の顔役でもあった。操船している帆引き船のすぐ近くまで船を寄せてくれたり、帆引き船の舳先を横切ってくれたり、要求したカメラアングルに協力してくれた。そのお陰で、観光帆引き船では見られない迫力ある写真を撮ることができた。

「水郷の想い出」の写真集には、水郷とは直接関係ないので、家族の写真は入れないようにしようと思ったが、1枚だけ載せてある。1968（昭和43）年に、私の住んでいる地域の嫁入り風景を写したものだ。お嫁さんのお祝いに近所の人たちが集まって来た。その人々の中に、私の大祖母、祖母、妻と子供の四代の家族が写っている。

これまでを振り返ると、この近隣の農村は基盤整備が始まり耕地整理が進んで、エンマ　（水路）がじゃり道になると、コンバインが使用されるようになり、農作業はどんどん機械化されていく。

手農業から機械農業に変革する時代に遭遇して写真を撮ったということが貴重なものとなった。コンバインを舟で運ぶ風景は、わずか1年移り変わりだったと思う。撮り始めたころは、記録として残そうという意識はなかったが、結果的には、失われた農村風景を写真で残したことになった。

（おわり。この連載の聞き書きは御供文範が担当しました）

（常陽新聞　H18.8.10～8.30を写真を除いて転載しました）